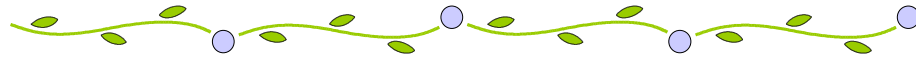


市川を調べる

発行 八戸市立市川公民館(氣田 武男)
市川を調べる会(会長 星 一郎)



市川昔がたい⑦



多賀台 奈良孝次郎

1.【国指定の史跡】

長七谷地遺跡は市川町字長七谷地(吹上)にあり、国指定の遺跡である。今から30年以上前になるが、長七谷地に工業団地を造成する計画がもち上り、遺跡の発掘をすることになった。その予備調査に、私は中学生と共に参加した。地勢はゆるやかな傾斜地で田畑や竹やぶ・雑木林が混在していた。その中の一角に散らばっている土器の破片や断片を集めることだった。2年後に、発掘結果についての説明会が発掘現場で行われた。住居跡などから割合に大きな集落があったと思われる。



2.【発掘の結果から】

人骨や歯は少しだけ出土したが量が少なく、どんな人たちだったかはよく分らなかった。使用した底がとがった土器(尖底土器)から縄文時代早期の遺跡と分った。八戸周辺では早いもので約7~8千年ぐらい前か。(土器からの推定なので、はっきりとは特定できない。)貝がらがたくさん出土(それで貝塚という)したが、ほかに動物の骨や魚の骨などもあり、当時の生活の様子が想像できた。当時の長七谷地は海に面しており、裏手の山林では狩り、前面の海では魚類をとって生活の糧にしていた。



3.【人々の生活】

遺跡から出土したもののから当時の生活の様子がよく分かった。動物の骨の中にはシカやイノシシ・タヌキなどもあり、いろいろな動物が山野に生息していた。長七谷地のあたりは湾になっており、そのあたりの海は塩分濃度がうすい(汽水域)という。)状態で、そこから多くの貝類(シジミ・アサリ・オオノガイなど)が採取できた。さらに、工夫した釣針(結合釣針)を利用して魚類(タイ・ブリ・サケ・スズキなど)をとっており、かなり大型のカツオやマグロも食用にしていた。木の実や植物性のものはたくさん利用したと思うが、残されていない。



4.【人々はいなくなった】

その後、長い期間の後に人びとは長七谷地から去っていった。その原因は、海面の後退で浅い海は湿地になり、雑木林になった。魚類をとるには不便になり、生活ができないので、人びとは住居地をかえるしかなかった。その後、雑木林になった一帯に開拓の手が入ったのは数千年後の平安時代(11世紀)だったと考えられる。参考：「長七谷地貝塚(調査報告)」→青森県教育委員会

【お知らせ】

当会会員・奈良孝次郎が〈邪宗門 昌益〉(299ページ)を出版しました。これは史実を基に創作された八戸藩をめぐる短編集で、いくつかの新聞でも紹介されており、一読をお勧めいたします。(天)